



# 大学での学びの作法・技法 (アカデミック・スキル)の修得

このコーナーでは、大学への取材や、朝日新聞×河合塾「ひらく 日本の大学」調査、河合塾×ACERで実施している大学生の学習経験調査JUESなどを通じて見えてきた、学生の成長を促す教育の取り組みについて紹介します。なお、ここでは「成長」を、「専門分野の知識・技能」だけでなく、「汎用的技能」「自己認識」など、幅広く捉えています。

7・8月号のテーマは、「大学での学びの作法・技法(アカデミック・スキル)の修得」です。

学生が大学教育を通じて成長するためには、自主的かつ自律的に学んでいく必要があります。自らテーマを設定し、情報収集して自分の主張を支える根拠を見だし、他の学生との議論や教員からの助言を通じて考えを深め整理し、論文やプレゼンテーションにまとめていくこととなります。そして、テーマを見つけたり自分の意見を持ったりするには、社会の出来事に関心を持つことに加え、本や論文の主張などを批判的に読む方法(クリティカル・リーディング)を身につける必要があります。情報収集のためには図書館の使い方や、アンケート等の社会調査の技法を学ぶことが求められます。論文執筆や発表においてもさまざまなスキルがあります。

こうした力は、高校までの教育でも、総合的な学習の時間での探究活動などを通じて育成が重視されていますが、大学進学までに十分に身につけている学生ばかりではありません。そこで、多くの大学では、初年次教育において、**<コラム>**で紹介するような、大学での学びの作法・技法(アカデミック・スキル)の修得に関連するプログラムを置いています。

これらの取り組みが大学での学習成果や社会に出てからの活躍にどのように結び付いていくのか、2大学の先生に紹介いただきました。

## Contents

慶應義塾大学 教養研究センター副所長  
片山 杜秀 教授 ..... p46

**早期に論文の書き方と  
プレゼンテーションの方法を修得する  
「アカデミック・スキルズ」を開講**

- ▶ 1・2年次に論文の書き方やプレゼンテーションの方法を身につけ、専門科目での学びを充実させる
- ▶ 前期4,000字、後期8,000字の論文を執筆
- ▶ 論文の要約を通してクリティカル・リーディングを身につける
- ▶ 履修者がゼミのリーダーや学習相談員を務めたり、研究者をめざしたりするなど、学習意欲の向上にもつながる

鹿児島大学  
総合教育機構・高等教育研究開発センター  
伊藤 奈賀子 准教授 ..... p49

**2016年度から全学部必修の  
「初年次セミナー」を導入し  
「自分で考える力」を育むライティング教育を実施**

- ▶ 大学進学までに「自分で考える」経験が不足していることが、近年の大学生の課題
- ▶ 全ての1年生が、学年末に3,000字の論証型レポートを執筆
- ▶ 意見を深めるには、まず自分で考えさせ、意見を書かせた上でディスカッションに臨ませることが大切
- ▶ 学生同士で互いのレポートを批判的・分析的に読み合い、レポートを修正させる

コラム 大学教育における「アカデミック・スキル」修得の取り組みの状況

今回のテーマである「大学での学びの作法・技法（アカデミック・スキル）の修得」に向けた取り組みは、主に初年次教育において行われている。文部科学省「平成26年度の大学における教育内容等の改革状況について（概要）」（平成28（2016）年12月公表）から見ていこう。

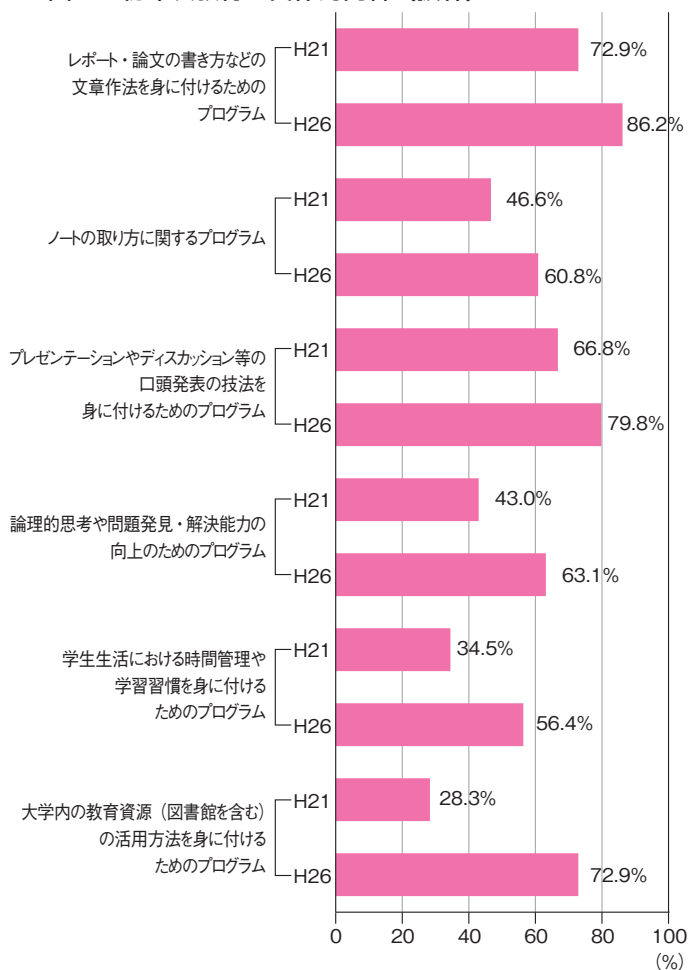
＜図1＞は、「初年度教育の具体的内容」のうち、アカデミック・スキルに関連すると考えられるプログラムを抜粋したものだ。「レポート・論文の書き方などの文章作法を身に付けるためのプログラム」（86.2%）、「プレゼンテーションやディスカッション等の口頭発表の技法を身に付けるためのプログラム」（79.8%）、「大学内の教育資源（図書館を含む）の活用方法を身に付けるためのプログラム」（72.9%）などを中心に、多くの大学で取り組まれている。また、2009年から2014年にかけて、すべての項目で実施率が高まっている。

いずれも国公私ので設置者別に大きな違いはなく、さまざまな大学の初年次教育において、アカデミック・スキルの修得を目的としたプログラムが置かれていることがわかる。

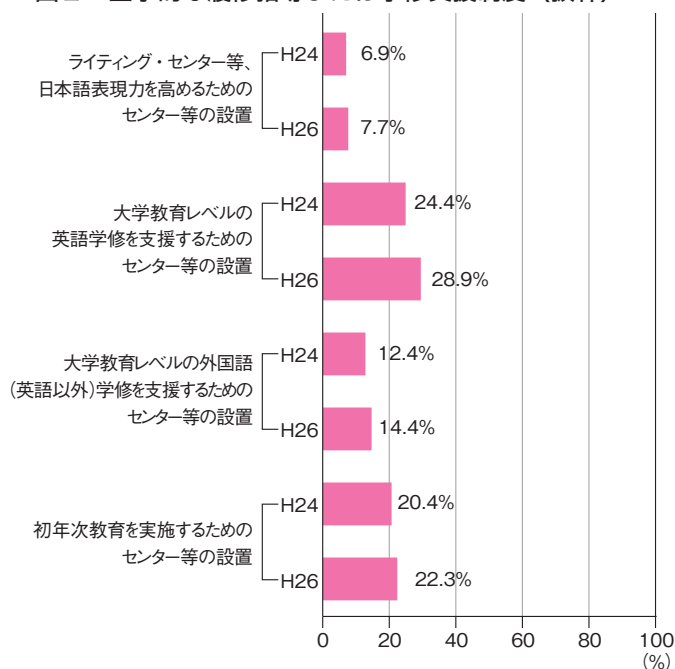
一方で、レポート執筆やプレゼンテーションの力は、継続的に取り組んでこそ伸びていくものだ。また、鹿児島大学の伊藤奈賀子准教授（p49）が指摘するように、アカデミック・スキルは初年次教育だけでは身につくとは限らず、そうした学生には2年次以降にもフォローしていく必要がある。

しかし、2年次以降の教育において体系的なプログラムを置いている大学は少ない上に、「ライティング・センター等、日本語表現力を高めるためのセンター等の設置」が、平成26（2014）年度でも7.7%など、全学的なフォロー体制を整えている大学は一部に留まる＜図2＞。2年次以降はゼミ・研究室や、個々の教員で必要に応じて指導しているのが現状のようだ。

＜図1＞初年次教育の具体的内容（抜粋）



＜図2＞全学的な履修指導または学修支援制度（抜粋）



文部科学省「平成26年度の大学における教育内容等の改革状況について（概要）」より

## 慶應義塾大学

# 早期に論文の書き方と プレゼンテーションの方法を修得する 「アカデミック・スキルズ」を開講

慶應義塾大学日吉キャンパスでは、7学部の1・2年生（文・医・薬学部は1年生のみ）が学んでいる。多様な学部の学生にふさわしい教養を研究するために、2002年7月に教養研究センターが発足し、実験授業などを重ねてきた。その成果の1つとして、2004年度に新設された科目が「スタディ・スキルズ」で、2005年度からは「アカデミック・スキルズ」と改称された。どのような目的で開講されている科目なのか。教養研究センター副所長の片山杜秀教授に伺った。

### 教養と専門の架橋の役割を果たすとともに 学部の枠を越えた出会いが刺激を生む

「アカデミック・スキルズ」では、主に学部1・2年生を対象に、1年間の少人数教育を通じて、論文の書き方やプレゼンテーションの方法を身につけることを狙いとしている。これには3つの意義があると、片山教授は語る。

「第一は、教養系科目はどうしても大教室の一斉授業が多くなりがちになるため、少しでも少人数教育の機会を増やすことが目的の1つです。第二は、教養と専門の架橋です。教養系科目を学ぶ日吉キャンパスと専門科目を学ぶ三田キャンパス等で、学び方のギャップが大きいため、教員、学生双方から、教養と専門をつなぐ役割を果たす科目が必要だという声が挙がっていました。第三は、複数の学部があることを生かし、学部の枠を越えた学びを活性化することです。せっかく日吉キャンパスには7学部の教員、学生が集まっているにも関わらず、それを生かしていませんでした。そこで、複数学部の教員がチームを編成して担当し、履修する学生も学部混在にした授業を開講することで、新たな出会いが刺激を生み、学生・教員双方にとって視野を広げるチャンスになると考えたのです」



片山 杜秀 教授

### 前期4,000字、後期8,000字の論文を作成 高い問題意識が求められるハードルの高い授業

「アカデミック・スキルズ」を履修する学生は、前期の「アカデミック・スキルズⅠ」、後期の「アカデミック・スキルズⅡ」を通年で履修する。現在、日本語3クラス、英語1クラスがある。1クラスは20名で、複数学部の3名の教員が担当する。いわゆるリレー形式ではなく、全ての授業が3名の教員によるチーム・ティーチングで進められる。

履修学生は7学部の学生が混在している。必修科目ではないため、履修者は各年度約80名と、それほど多いわけではない。実は、この限定された人数というところに、科目の性格も表れている。というのも、「アカデミック・スキルズ」は、多くの大学の初年次教育で行われているライティングの基礎を修得するような授業ではなく、本格的な論文の作成を課すものだ。学生は前期で4,000字、後期で8,000字を課される。論文のテーマは学生が自由に決められることができるが、所属する学部に関係するテーマを選ぶ学生が多いようだ<表>。自由なテーマで執筆するのは楽なようでいて、論文に見合うだけのテーマを見つけられる問題意識がなければ、執筆に取り掛かることもできない。さらに英語クラスでは、日本語の指定字数に匹敵する語数の英語論文を仕上げるのが求められ、授業も英語で行われるため、相当なレベルの英語力がなければついていけない。低学年の学生にとってはかなりハードルが高いのである。

「それでも、慶應義塾の学生は意欲が高く、厳しい授業であることを覚悟の上で、例年、定員の倍以上の学生が



＜表＞アカデミック・スキルズ 論文テーマ例（2016年度履修者）

論文タイトル	学部
北陸観光ブランディングのための観光商品案	商学部
なぜ人型ペットボトルは普及しないのか ー見た目を基に考えるー	理工学部
スイスの「魔法の公式」の裏側 ー現代の民主主義国家が内包する問題とはー	経済学部
恋愛ソングの歌詞から恋愛観の変化をよみとく	理工学部
バリアフリー日本語字幕とフォント ー効果音の表現方法についてー	経済学部
谷崎の虚偽と三島の真実 ーマゾヒズムを通じて男性を考えるー	文学部
シンガポール共和国における華人の若者のアイデンティティ	商学部
現代社会に受け継がれた「ディベート」とは何かー話し方を追究し続けた人々の歴史から考察するー	法学部
Should Japanese Olympic Athletes Drink Coffee to Enhance Their Performance?	医学部
Can We Produce Designer Babies in Japan? -Analysis of Rapid Development in Technology and Concerns about Gene Modification-	医学部
2016年の英国国民投票における高齢者の離脱投票	法学部
『レ・ミゼラブル』における人物の典型化・理想化の背景と帰結	文学部

履修を希望してきます。そのため、志望理由書と面接によって選抜を実施しています。原則として、1・2年生対象なのですが、中には、卒業論文のために履修したいと、3・4年生が履修を希望し、この授業のためだけに三田キャンパス、湘南藤沢キャンパスから通ってくる学生もいます」（片山教授）

厳しい分だけ役に立つ科目という認識が浸透しており、問題意識の高い学生が集まっていることは間違いないといえそうだ。

なお、「アカデミック・スキルズ」は、日吉キャンパス内の教養研究センターが開講している。

## 論文の要約を通して クリティカル・リーディングを身につける

授業の内容を見てみよう。

履修学生は、教科書として『アカデミック・スキルズー大学生のための知的技法入門』を利用する。授業は、教科書の項目である、「講義を聴いてノートを取る」「情報収集の基礎ー図書館とデータベースの使い方」「本を読むークリティカル・リーディングの手法」「情報整理」「研究成果の発表」「プレゼンテーション（口頭発表）のやり方」「論文・レポートをまとめる」に準拠して行われる。前期に4,000字、後期に8,000字の論文を執筆し、そのまとめとしてプレゼンテーションを行う点は共通しているが、指導方法・内容は各クラスの担当教員の裁量

に任されている。それぞれの教員の経験を踏まえて、マンツーマンに近い体制で、きちんとした論文を書くために必要なことを、学生のレベルに応じてその都度指導していく。いわば卒業論文の指導スタイルに近い。

片山教授の授業では、まず「クリティカル・リーディング（批判的読解力）」の授業を行い、その後はグループや個人での論文指導となる。クリティカル・リーディングについて具体的に紹介しよう。

「私たちのクラスでは、論文の作成、プレゼンテーションの前に、学生自身の論文を読む力を養うため、『クリティカル・リーディング』を行っています。

論文の善し悪しを判断するためには、学生が実際にさまざまな論文を読み、批評することが重要です。その際にヒントになるのが要約のしやすさです。低学年でも理解しやすいテーマの論文を選び、その要約を必ず宿題として課しています。要約がしにくい場合、論文が論理的ではないのか、それとも自分の要約力が不足しているのかを学生同士でディスカッションしてもらいます。ほかにも各自の要約を比較して検討し、『不可欠なキーワードを拾っていない』『言い換えをしすぎて、要約とはいえない』『文章を摘んで、つなげただけになっている』など、自分の要約の弱点もわかります。

こういったクリティカル・リーディングが批判的・論理的思考の育成につながり、自分で書く論文のテーマを発見する力や、読者に伝わりやすい論文にまとめる力が

育まれていきます」

この後、学生は論文の作成に取り掛かる。まずはテーマを設定するが、その際、「テーマが広すぎる」「テーマが特殊すぎて、資料が見つからない可能性が高い」場合は、途中で論文がうまくまとまらず脱落してしまうことも考えられるので、教員と話し合いながら修正する。テーマが決まったら、章立ての構成を考え、参考文献を調べ、論文の執筆に備える。実際に論文を書く際も、いきなり書き始めるのではなく、まず500字前後、次に1,000字という風に、少しずつ字数を増やしていく。授業では、学生が書いてきた論文をチェックし、文章の論理構成を明確にするためのアドバイスをするなど、論文の作法をきめ細かく指導している。

あわせて、効果的なプレゼンテーションの方法として、発表のための情報整理の仕方やパワーポイントの活用法なども学ぶ。

「プレゼンテーションでは、単に論文を要約するのでは不十分です。要点を絞り、わかりやすい画面を作るなど、発表のための工夫が必要になります」(片山教授)

また、片山教授のクラスでは、前期はグループ論文、後期は個人論文としている。

「前期、後期ともに個人論文にすると、後期は単に前期の論文の文字数を増やただけで終わってしまう可能性があります。グループ論文では、メンバーでディスカッションする中でコミュニケーション力が高められますし、他の学生の担当部分との整合性を図る作業を通して、論理的に考える力も養われるメリットがあります」(片山教授)

### 専門の学びにも意欲的で、ゼミのリーダーになり大学院に進学して研究者をめざす学生も多い

「アカデミック・スキルズ」の成果としては、毎年、履修学生の論文をまとめた「論文集」を作成している。そのほかにも、学生のインセンティブを高めるために、年度末に、論文、プレゼンテーションともに、各クラス2名の代表が選抜され、コンペティションが開催される。優秀者には金賞、銀賞等の表彰制度もある。

「統計をとっているわけではありませんが、この授業を履修した学生は、専門科目の学びにも意欲的で、ゼミのリーダー的な役割を務めているほか、大学院への進学率も高く、研究者志向の強い学生が多いという感触がありま

す。将来、研究論文に取り組む上での良いトレーニングの機会になっていることは間違いありません」(片山教授)

さらに、「アカデミック・スキルズ」を履修した学生が図書館で「学習相談員」を務めるピア・メンター制度も設けられている。学習相談員は教員が選抜し、現在、10数名の学生が活動している。レポート作成で悩んでいる学生の相談に応じ、書き方のノウハウを教えている。学生の方が気軽に相談しやすい面もあるのか、学期末レポートの時期には、相談に訪れる学生が殺到するという。学習相談員の学生にとっても、他学生に教える中で、自らの学びを振り返るチャンスにもなっているという。片山教授の話にもあったように、大学院に進学し大学教員になる学生もいると考えられ、教える訓練の機会ともいえる。慶應義塾大学には、教える側と学ぶ側が別々にあるのではなく、互いに教え合い、学び合い、啓発し合う「半学半教」の伝統が根づいている。その精神を学生同士の学び合いにおいても体現した場ともいえよう。

### 教養研究センターで授業モデルを開発し学部の授業にも広げていきたい

「アカデミック・スキルズ」を開講する教養研究センターの副所長である片山教授は、今後の方向性について次のように語る。

『アカデミック・スキルズ』の担当教員は皆、センター専属の教員ではなく、学部との兼任になっています。履修希望者が多いこともあり、コマ数をもう少し増やすのが理想ですが教員体制の問題もあって、それは困難なのが実状です。そこで、私が考えているのは、各学部でこういった授業を開講してもらうことです。センターは教養系授業の開発の役割を担っており、『アカデミック・スキルズ』をモデルとした、学部が開講する授業があってもよいと思います。一方で、現在1つだけの英語クラスは拡充する必要性を感じています。当初は、低学年次で、英語でディスカッションして、本格的な英語論文を1年間で仕上げるのはハードルが高すぎるのではないかと心配していました。ところが、高校までの英語教育のレベルが向上しているためか、十分に対応できる学生が増えている印象があります。すでに数多くの学会で英語が共通語になっている時代であり、今後の研究者には英語力が不可欠になります。早い段階から英語で研究を進められる力を養うことが、ますます重要になると考えています」

## 鹿児島大学

# 2016年度から全学部必修の 「初年次セミナー」を導入し 「自分で考える力」を育むライティング教育を実施

鹿児島大学では2016年度、大幅な共通教育改革が行われた。共通教育を「すべての学部の学生に対して、一定水準の共通の能力を保证するための教育」と位置づけ、カリキュラムが再構築されている。改革の柱の1つが、「初年次セミナー」を開設し、全学部必修科目としたことである。その狙いは何か。どのような能力を高める内容になっているのか。総合教育機構・高等教育研究開発センターの伊藤奈賀子准教授に伺った。



伊藤 奈賀子 准教授

## 86%の大学で初年次教育として 日本語ライティング教育を実施

文部科学省「平成26年度の大学における教育内容等の改革状況について（概要）」によると、初年次教育の一環としてレポート・論文の書き方などの文章作法を身につけるためのプログラムを行っている大学は、2009年の時点で533大学（72.9%）、2014年で636大学（86.2%）にのぼっている（p45参照）。その内容は大学によって異なっており、一くくりで語ることはできないが、大学生の「書く力」に課題を感じる大学が多いことがうかがえる。

なぜ大学においてこうした日本語ライティング科目の設置が必要になってきたのか。実は、その動きが生まれたのは、かなり以前からであると、伊藤准教授は語る。

「1990年代前半から、全国の大学で組織的な取り組みが始まっています。おそらく発端は、学生の書く文章の質が落ちてきたという教員の皮膚感覚でしょう。背景には、少子化や大学進学率の上昇に伴う学生の学力の多様化があります。危機感を抱いた教員が自発的に対策を立て始めたものの、個々の教員の努力だけでは対応は困難で、組織的な取り組みへと広がっていったと思われます。また、多くの大学が研究だけでなく教育も重視するようになりました。実際には学生の書く力はそれほど変化していなくても、教員が教育を意識するようになった結果、書く力を鍛える必要性を感じたのかもしれない」

## 資料を要約して報告することはできるが 資料に対する自分の意見が述べられない

では、具体的にどのような力に課題があるのだろうか。伊藤准教授は「ライティングの方法論やテクニックは、指導すれば学生はそれなりに身につけられます。問題は、ライティングのベースとなる『自分で考える』経験が、大学進学までに不足していること」と指摘する。

しかし近年は、小・中・高等学校を通じて、知識を一方通行で教える講義形式だけでなく、グループでディスカッションし、意見を集約して問題解決を図り、プレゼンテーションを行う、いわゆるアクティブ・ラーニング（以下、AL）形式の授業が盛んに取り入れられている。「自分で考える」トレーニングの機会は、むしろ増えているはずではないだろうか。

「新入生の様子を見ると、多くの学生が、資料などを読んで、内容を要約して報告することは問題なくできます。高校までのALで、調べ学習を行っている成果でしょう。ところが、『資料に書かれていることに対する自分の意見を述べなさい』と言うと、途端に固まってしまう学生が少なくないのです。本来、自分の考えと、資料や先行の研究論文などを比較し、検討することによって、考えを深めるのが、大学における学びです。そうした考え方の姿勢が身につけていないことは大きな問題です。高校までのALは、生徒に活動させるばかりでなく、自分の頭で考えさせることをもっと大切にしてほしいと考えています」（伊藤准教授）

批判的にものを考える経験も足りないと感じている。



「本やインターネットに載っている情報を、すべて正しいものみにしがちですし、授業中に『先生が言っていることが正しいとは限らないよ』と語ると、ほとんどの学生がキョトンとした顔をします。良くも悪くも素直なのです。けれども、学問の世界では、これまで正しいと思われていたことが覆るのは日常茶飯事です。またそうでなければ学問の進歩はありません。卒業論文レベルになれば、既存の論文に対して、自分なりの視点で疑問を感じ、仮説を立てるところから研究がスタートします。低年次のうちにそうした意識を身につけておかないと、その後の大学での学びにはついていけませんし、卒業論文も執筆できません」(伊藤准教授)

### ディスカッションの前に 自分で考え、意見を書くステップを踏む

2016年度から、鹿児島大学で共通教育改革の柱として導入された全学部必修科目「初年次セミナー」は、このような問題意識に基づいて組み立てられている。

前期の「初年次セミナーⅠ」は、1クラス30名程度で、5名前後のグループに分かれる。グループは全学部必修科目になっているメリットを生かして、複数の学部の学生が混在するように配慮している。文系、理系の枠を超えて、多様な考え方に触れて、協力してミッションを達成する経験が貴重だからである。

2016年度は、統一テーマ「大学生の就職に関する不安とキャリア形成」に関連するテーマを、グループで話し合っただけで、自分たちの主張を支える根拠となる資料を探し出し、それを持ち寄ってディスカッションし、最後にプレゼンテーションを行った。なお、実施2年目となる2017年度は、取り組み方はそのまま、テーマを「現代社会が抱える諸問題」とし、「問題の所在」「問題の原因」「解決すべき課題は何か」「具体的な解決策」の4つを明示するという条件が課して行われた。

「私の授業では、すぐにディスカッションを開始しないことを徹底しています。前段階として、必ず自分で考えさせます。そして、自分の意見を整理し、相手に伝わるようにするために、意見を書いてからディスカッションに臨ませます。このステップを踏まないと、単なるその場の『思いつき』の意見が飛び交うだけで、議論が深まらないからです」(伊藤准教授)

こうした授業の組み立てにすることによって、先述した「自分で考える」姿勢を養おうとしているわけである。

もう1つ重視しているのが、きちんと相手に伝わるようなコミュニケーション力の強化である。

「入学直後の学生は、背景が異なる人々と話した経験がほとんどありません。けれども、いずれ社会に出れば、世代はもちろん、場合によっては人種や国籍も異なる人々と接することになります。そうした社会で求められるコミュニケーション力を高めることも、本セミナーの目的です。学生には、『思ったことを言うだけなら簡単だが、相手がわかったという状況が生まれて、初めて成功』と繰り返し指導します。例えば、授業の中で、1人1分間限定で話をさせます。短い時間に言いたいことを詰め込むのは難しいことですが、ならば『大事なことは最初に言うようにしよう。そうすれば時間切れになっても、最も伝えたかったことは相手の頭に残る』と教えています。また、教育学部の学生であれば子ども、医学部の学生であれば患者にわかる説明をする意識を持たせるため、専門用語ばかりを使わず、どの用語に説明が必要なのか、適切に判断できる力も養うように心掛けています」(伊藤准教授)

### 教員や他の学生の指摘を踏まえて レポートを改善する

次いで、1年次後期の「初年次セミナーⅡ」は、日本語ライティング能力の向上に特化した授業になっている。「Ⅰ」と同じクラス編成だが、今度は学生個人でレポート作成に取り組む。前期と同じ統一テーマ「大学生の就職に関する不安とキャリア形成」に関連するテーマを自分で選び、最終的に約3,000字の論証型レポートに仕上げることが目標とする。

全15回の授業では、ワークブックに基づき「論証型レポートとは」「パラグラフ・ライティング、序論の書き方」「引用の目的と具体的な記述方法」など、毎回設定されたテーマに従って、レポート作成の作法を学び、「資料やデータ等の根拠に基づく主張ができる」「科学的根拠に基づくデータを読み取り、その内容について説明できる」「事実と意見とを区別し、論理的な文章表現で論証型レポートを作成できる」といった力を身につける<表>。

学生が学期中に教員にレポートを提出する回数はクラスによって異なっているが、毎週のように書き直してきて、レポートを改訂していく学生もいるという。

「ただし、私の場合、文章の添削指導はしません。その通りに直して終わりと、学生が思っただけでいいからで

す。問題点だけを指摘して、それを踏まえてどう修正すればいいのかは、自分で考えさせるようにしています」（伊藤准教授）

さらに、学生が書いたレポートを、グループの他の学生も読んで、意見を言い合う機会を設けている。とても有効な学びと思われるが、そこに根深い課題も生じている。

「最近の学生にとっては、他人の文章に自分の意見を言うのは、とても重いことのように、嫌がるケースが見られます。強いて意見を求めると、とりあえず『良かったと思います』と褒めて終わらせようとしています。それでは単なる感想であり、批判も分析ありません。『このレポートをより良いものにするにはどうすればいいのか、その観点で意見を考えなさい』と繰り返すのですが、なかなか難しいことのように。これは最近の学生の気質にも関係していると思います。素直で温厚なタイプが多く、相手を傷つけないという気持ちが強く働く面があります。意見といえば『褒める』と『けなす』の感情的な両極でしか捉えられないところに、幼さも感じられます。『批判』イコール『けなす』ではありません。『この文章を読んで、自分はこう考える』→『なぜなら、このような理由があるから』といった論理的な思考力と表現力を身につけるように、繰り返し指導しますが、なかなか手強い状況です」（伊藤准教授）

### テーマが見つからない学生も散見され 2年次以降のフォローも検討

こうした指導を通じて、多くの学生が自分なりにテーマを見つけて主体的に考える姿勢を身につけていく一方で、「初年次セミナーⅡ」の終盤になってもテーマが決められない学生も散見された。

「『Ⅰ』のグループディスカッションでは見えにくいのですが、『Ⅱ』で一人ひとりレポートを書かせると、学生の力の差が明確に見えてきます。レポートが書けない学生の大学入試の成績を見ると、得点が低かった学生ばかりではありません。大学で指導するのでは遅いのかもかもしれませんし、現在の大学入試では、こうした大学で学ぶために必要な力を十分に評価できていないののかもしれません。いずれにしても、それでは卒業論文が執筆できませんから、大きな問題です」（伊藤准教授）

<表> 「初年次セミナーⅡ」ワークブック テキスト構成

	テーマ
第1回	オリエンテーション／夏季休暇のレポートの振り返り
第2回	論証型レポートとは
第3回	パラグラフ・ライティング、序論の書き方
第4回	レポートにふさわしい表現
第5回	「問い」の設定
第6回	レポートの基本構成と仮アウトラインの作成
第7回	学術的文章の倫理とリスク
第8回	引用の目的と具体的な記述方法
第9回	アウトラインの再検討
第10回	図表の用い方と具体的な説明方法
第11回	資料の活かし方①：実験、観察等
第12回	資料の活かし方②：調査
第13回	資料の活かし方③：文献
第14回	レジュメ作成
第15回	レポートの完成と学習の振り返り

伊藤准教授は、そうした学生たちをフォローするには、「初年次セミナー」だけでは困難で、2年次以降も何らかの形で支援することが必要だと感じている。

「1年間、『初年次セミナー』を実施して、伸びる学生と、低空飛行のままの学生に分かれ、格差が広がっている印象があります。伸びる学生は、より高度な課題を与えればいいのか、問題は伸び悩んでいる学生への対応です。大学生として、最低限できるようになっておく必要があることを整理して、学生と共有して、徹底的に鍛えることが大切になります。けれども、『自分で考えなさい』と指示するだけでは、そもそも考えるとは何をどうすることなのか、わかっていない学生には無理です。そこで、教員、あるいは先輩学生が横について、何をどう考えて、意見にまとめればいいのか、具体的な思考のステップを伴走し、振り返りを重ねるような、手厚い方法で支援する必要性を感じています。それは授業だけで実施するのは困難で、授業時間外などを活用した特別プログラムも検討する必要があるでしょう。早い段階でフォローしておかなければ、卒業論文はもちろん、教育実習や就職活動にも影響が出る恐れがありますから、比較的時間に余裕がある2年次でのフォローアッププログラムが必要になると考えています」（伊藤准教授）

「初年次セミナー」は導入からまだ1年で、成果や課題の検証はこれからだ。学生調査の結果などを参照しながら、セミナー導入前後の学修行動の違いや、他大学の状況と比較し、今後の指導方法について検討する予定である。